

高須俊行先生が私たちに残した言葉

成岡 市（三重大学）

高須俊行先生は、多くの人材を世に送り出し、その成果が語られる前に旅立たれました。

冒頭をお借りしまして、高須俊行先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

高須俊行先生は、自著「80年史：未来を追いつつ80年—思えば長生きしたもんだー」（2003、東京農業大学農地環境工学研究室発行）に、人生の道筋で「モシ」というものがあつたら・・・、と深い意味を込めてお書きになっています。

私は、間もなく還暦を迎える頃となりました。この機会に、高須先生の「モシ」を受けて、自らの微少・微弱な人生に何かしらの記録を残しておきたいと思ひます。

私は、「モシ」農大生を全うしていたなら、昭和58年組として同級生達と共に翠萌会名簿に記載されていたと思ひます。しかし、糸の切れた凧のように宙を彷徨う人生を送ることになり、「モシあの時、駒村正治先生が私を研究室に引き取っていただけなかったら・・・」、「モシその時、高須先生に出会っていなかったら・・・」と、今でもつぶやくことがあります。高須先生と駒村先生には、どれほどのご心労をお掛けしてきたことか、お詫びの申し上げようもございません。

高須先生は、東京農業大学にご在籍中、いくつかの言葉を私（達）に投げかけてくださいました。ここにあらためて振り返り、考え直してみたいと思ひます。

1. 「同じ所に長居しない」、ということ

高須先生は、生涯、公共の仕事（Public Works）に尽くされました。

その高須先生は、「同じ所にいて、長い時間をかけて成し遂げる人」、あるいは「多くの異動があつて、キャリアを積み重ねて成し遂げる人」の二つのタイプがあるとするとどうだろうか？と問いかけてくださいました。

後者は、行政のトップに位置する人物の要件であると聞かされました。しかし、同じ所にいてもいなくても、頭脳はめまぐるしく働き、臨機応変に対応できる方もいます。そうすると、「同じ所・・・」という意味は、「同じ事にいつまでも固執してはならない、馴れ合いは避けよ、臨機応変・自由自在に対処せよ」ということをお示しくださったのかもしれない。

高須先生は、宮崎県の名家にお生まれになり、台北帝大、台湾省、農林省、宮崎県、農業土木試験場、東京農大、・・・、と歩まれました。その高須先生が、ときおり、さりげなく、ご自身の人生観を語られることがありました。

何をご覧になって、何をお考えになってこられたのか、数え切れない出来事があつたに違いありません。高須先生の現場の体験談はリアルでした。先生のご友人とのおつき合い話から多くの夢を感じました。行政手腕、技術者魂、研究・教育者の蘊奥（うんおう）、どれをとつても高須先生は超一流でした。

すなわち、広く深い視野を持って大きな問題を解決できるご器量をお持ちの方は、同じ所に長居しない（同じ事にいつまでも固執せず、臨機応変・自由自在に思考しなさい）ということは人生の要件かもしれない、と高須先生は言い残されておられます。

2. 「敗北の美学、男の美学と自然体」、ということ

太平洋戦争で敗戦を経験された高須先生の深い言葉です。

夕陽を背に受けて独り荒野を歩む、米国映画のシェーンか、黒澤映画の椿三十郎か、格好の良さ、男の臭さを感じさせていただきました。高須先生の学生時代、剣道場で汗していたお姿は、まさしく「自然体」であります。

「敗軍の将、兵を語らず」という諺があります。勝った負けたは男社会に付き物ですし、潔さが男の美学なのかもしれません。しかし、多くの人々を引き付けるのは、「資金力や腕力や大声ではなくて、人柄や精神性にある」ということを教えてくださったように思います。

仏教では「おのれ(自我)」を抑制することの大切さを追究しているとのこと。おのれが迷いの元であり、おのれが間違えれば周囲に迷惑を掛ける。おのれが見えなくなるまで徹底的に鍛錬・修行を続ける世界があるという教えです。高須先生は、お若い時代に、武士道から仏門へ入られたとのことでしたが、どこまで鍛錬・修行を続けられたのでしょうか。

3. 「知恵は小出しに出す」、ということ

当時40歳代のエネルギーが余り、分別がつかない私に対して教訓を頂戴しました。

鼻をフンフンいわせて前傾姿勢をもって講義をしています、と申し上げたことがあります。

それに対して、「小出しにしないで」と軽くあしらわれました。しかし、その意味には重いものを感じました。自分は持っていると思つた「知識、経験、発想」を生そのまま披瀝(ひれき)する前に、ゆっくりと深呼吸をなさ、ということ。

一言が百言の理解を促すことがあります。しかし、その境地に至るには、一朝一夕ではありません。つま先立ってソワソワしている姿は、どこからみてもスキ(隙)だらけです。自分ではそれは見えません。

高須先生の後ろにも目がある姿「自然体」には、オーラが取り巻いていました。

4. 「全体をみて、そして細部にとりかかれ」、ということ

人生の視点の置き所に関する高須先生のご忠言です。

農業土木に「点から、線、面へつなげよ」という、計画・調査・設計・施工・管理に欠かせぬ方法論があります。農業土木系に学ぶ学生は、講義のどこかで、忠犬ハチ公の飼い主の物語を聞いた後に聞かされる言葉と思います。まず、全体が見えてから着手する「点から・・・」の意味は重要です。

研究者の中には、いきなり細部・深部に入り込んでしまつて、とんでもない結論を導き出してしまふことがあります。自分の位置、視点の位置、研究の方向、それらがしっかりとしていないと意味不明になってしまいますよ、ということ。

ときどき自問自答することがあります。「細部」という部品を沢山作つておいて、後になってそれらを組み立てて「全体」を作るという方法について、全体設計(展望)が見えていなければ、不格好な姿になりかねません。

5. 「それが何に役立つのか考えよ」、ということ

高須先生は若い研究者に対してよく言われていました。

役に立たないものに熱中するのが若者の特権だ、などと元気な大学生は言い返したくなるかもしれません。「遊ばせて下さい。ですから、授業も時々休講にして下さい。」と。それなら「遊び」とは何であるか? キャッチボールやパチンコに興じることなどが遊び、とは限りませんね。

禅問答のようですが、意味のある遊びも必要な「それが何に役立つのか」は、高須先生の重い言葉でした。

6. 「人を育てる」(人の和を大切にする)、ということ

高須先生は、我々を赤提灯によく連れて行っていただきました。その時も、今でも、深く感謝しています。赤提灯では、放課後の「高須学校」が開かれます。お酒の飲み方・注ぎ方から人生の機微まで、昼間は潜めていた高須語録の収穫場でした。

7. 「酒の飲み方と吐き方を知れ」、ということ

私は、かつて「自啓寮(じけいりょう)」(岩手大学農学部 of 学生寮；盛岡高等農林に学んでいた宮沢賢治も在寮していた)で学生生活を送っていたことがあります。その学生寮では、先輩・後輩の上下関係を学びました。社会人になってからの人間関係の覚悟を決める、というような場所でもありました。よく飲まされ吐かされ、そして飲ませ吐かせていました。

高須学校では、酔う前に吐く、酔っても酔わぬ振りをすることを言葉で学びました。

8. 「もう帰らん会 (モウカラン会)」

高須先生が、筑波研究学園都市にお住まいの頃、行きつけの飲み屋で結成されたという酔客常連の集まりのことです。

その頃の数少ない赤提灯では、高学歴の国家公務員や研究者が狭いカウンターで肩を並べて一杯やっていたとのこと。仕事を離れば、皆同じだよ。ということで顔馴染みの方々に、高須先生は万遍なくお酌して廻っていたと、どなたかにお聞きしたことがあります。

高須先生が当時勤務されていた農業土木試験場(現 農工研)とお住まい(官舎)の間は、試験場長のために用意されている「黒塗り、専属運転手付き」の公用車で通勤されていたとのこと。

夕方の帰宅時、高須先生はいつものように試験場正面玄関前で待っている黒塗りに乗り込んで筑波の中心部へ向かいますが、官舎の前やお決まりの赤提灯の前には止まらず、つまり玄関横付けは決してされなかったとのことでした。目的地の遙か前で黒塗りを降りて、徒歩で目的地に向かっていたのだそうです。

東京農大に移られた高須先生は、所用で筑波に行くと、退職した後であるにもかかわらず「場長(じょうちょう)」と呼ばれていました。高須先生のお人柄がほとぼしっていました。

9. 「酒・金・女性から足がつく」、ということ

この言葉は少々波紋を呼びそうです。しかし、人の上に立つ方、とくに公共事業で活躍される方、いつの時代になっても要注意ということ。

10. 「日記帳は持たない」、ということ

誰かが、重責を伴う肩書きを持った時に、必ず思い出さなければならない言葉のようです。

その筋の方々が「ガサ入れ」する目標物は、行動記録が記されている手帳(日記帳)だそうです。高須先生は、日記帳を持たず記憶だけを頼りに公務に就かれていたそうです。併せて、これは、高須先生が常に頭脳明晰であるための秘訣だったかもしれません。心当たりのある人は、手帳を急いで見る必要があります。今の時代では、携帯電話のメモリーでしょうか。知られたらまずいメモはありませんか？

11. 「みやげ物屋に並ぶ品物から土地を知れ」、ということ

よく出張旅行に連れて行っていただきました。

土地の何かしらを知ること、土地の活性化の糸口を探しあてること、は農業土木人の勘どころと言われます。

農家に水洗トイレを普及させて外国人も泊まれる村にしたい、老人会で道端の花を管理しながら町を生き活きさせたい、道路は環状につなげないと物流が進まない、などなどさまざまな勘所を高須先生から教わりました。

鉄道駅や飛行場のみやげ物屋に並ぶ品物から土地の様子が見えるようになるまで、還暦を目の前にした私でも、まだ若すぎます。

12. 「人を愛して、土地を愛する」、ということ

高須先生は「80歳に近づいた頃、老人とはこういうものかと自覚するようになった」とお話されています。

高須先生は、全国さまざまな土地を訪れ、さまざまな人々と出会ってこられました。水戸黄門の境地でしょうか？ 高須先生が注がれた「人と土地」への愛情は、高須先生の人生観の一つでもあったと思っています。

後進を育てること、人の和を大切にすること。この二つは高須先生の何気ない言葉や姿から学びとるしかありませんでした。「学ぶ」の奥義は、すなわち「真似る」にあり。

13. 「翠萌会の設立（人生のベンチマークを創る）」

翠萌会創設者の高須俊行先生は、何を考えておられたのでしょうか。

農業土木技術の一つに測量技術があります。伊能忠敬編纂日本地図「大日本沿海輿地(よち)全図」が最近見直されています。測定器械がどれだけ進化しても、技術だけは先達（先輩）から後進（後輩）へ口伝えや手取り足取りで継がれなければなりません。

高須先生が台北帝大で測量を学んだ時の話があります。当時の実習はのんびりだったのでしょね。大変羨ましいです。学科に専属する技官（技術的なことについて教官を補佐する職員）がトランシットを据え付け後、実習生達は望遠鏡をちょっと覗くだけでよかったというのです。また、箱尺（スタッフ）を立てる時には「上を見よ」と教えられたとのこと。前方のレベル・マンを見ず、なぜ上を見る？ 測量実習地は台湾です。樹木の枝に昼寝している蛇を箱尺で脅かすことのないように注意しなさいという教えだったそうです。

測量技術に「ベンチマーク、バックサイト、フォアサイト」という専門用語があります。何か困ることがあれば、「人生のベンチマーク（位置が確定された既知点）をバックサイト（後視）し、次に行くべきあるいは考えるべき方向をフォアサイト（前視）する」、という意味にもつながります。

「翠萌会」は一等級のベンチマークとして継承されていくことと信じます。

14. おわりに

高須俊行先生。あちらの世でも、方々を歩き回り、ご同僚の方々と語り合っておられるのでしょうか。

高須俊行先生、安らかにやすみください。

<所収>

成岡市(2014)：高須俊行先生が私たちに残した言葉、翠萌「故高須俊行先生 追悼号」、東京農業大学農村環境工学研究室、37-41

<故 高須俊行 先生略歴>

大正 11 年 台湾台北州 生誕
昭和 20 年 台北帝国大学理農学部農業工学科卒業(第 16 回生)
昭和 22 年 農林省入省
昭和 25 年 農地局建設部設計課
昭和 31 年 農地局建設部技術課
昭和 36 年 中海干拓調査事務所長
昭和 37 年 農学博士「干陸後の地盤沈下に関する研究」(京都大学)
昭和 44 年 宮崎県経済部長

昭和 46 年 宮崎県農林水産部長
昭和 53 年 農水省農業土木試験場長
昭和 56 年 東京農業大学農学部教授
平成 4 年 叙勲「勲三等瑞宝章」
平成 5 年 東京農業大学農学部教授退職
平成 25 年 逝去 享年 92
平成 25 年 農業農村工学会誌「水土の知」81(10)に追悼文掲載